

大応国師塔〔妙心寺の南五町許、安井村竹林の中にあり。此地原国師の開基龍翔寺の旧蹟なり。寺は応仁の兵火に亡ぶ、近年龍翔寺の文字の古瓦を掘出す。今は紫野大徳寺塔頭の中に寺号を移して再興に及ぶ。則ち大徳寺の開山大燈国師の師なり。入宋して虚堂和尚に法嗣す、本朝達磨宗の大徳なり〕

伝云、大応国師、諱は紹明、字は南浦、駿州安倍郡の巨族藤氏の子なり。幼して駿州建徳寺浄辨に事て法の出世を学び、年十五才にして薙髮し、具足戒を受、鎌倉建長寺蘭溪隆和尚に参禅し、正元の頃宋国に入て偏く諸山を訪ふ。時に虚堂和尚浄慈に拠て道風高峻学者敢て其門に登る事なし、南浦参謁して機鋒相契ふ、虚堂大に歡んで賓客に典しむ。日夕咨扣に、一日虚堂の頂相を摸して讚を請ふ、虚堂書して曰、

紹既明白。語不<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>宗。手頭<sub>ニ</sub>籤算<sub>ス</sub>。

金圈栗蓬。大唐国裏。無<sub>二</sub>人<sub>一</sub>会<sub>スル</sub>。

文永八年太宰府崇福寺に止錫する事三十三年、参徒日々に熾なり。嘉元の間詔を奉て京師に入、太上皇〔後宇多帝〕召て宮掖<sub>ニ</sub>対し、問答叡慮<sub>ニ</sub>称ふ。勅を下して万寿禅寺を主どらしむ。延慶元年臘月廿九日忽微疾あつて、頌を書して曰、

訶<sub>レ</sub>風罵<sub>レ</sub>雨。仏祖不<sub>レ</sub>知。

一機瞥<sub>レ</sub>転。閃電猶<sub>ホ</sub>遲<sub>シ</sub>。

書し畢て加趺して逝す。〔世寿七十四歳〕上皇哀慕して已<sub>マ</sub>ず、勅して円通大応国師と諡ある。寺を右京に營て額して龍

翔しやうと号し、塔を後山に築つくて普光ふくわうといふ。

一休和尚年譜云 寛正二年春。遊あそ嵯峨さあが。路經ちよ西京さいきやう入拜いんぱい龍翔りゆうせう之塔のた。荒涼しやうりやう僧少そうせう。堂宇傾欹たううけいぎ。昭堂しやうたう特龍山所とくりゆうさんしよ堂たう而独

無な恙じやう。庫院最廢こゐんさいばい。

狂雲集 感かん龍翔廢寺りゆうせうばいじ

常住物誰用じやうぢゆうぶつたれもちよ己身こみ。山門さんもん境致剪きり松しょう。■

殿堂たうだう只与ただよ花零落はなれいらく。廢地ばいぢ秋風二月春あきかぜにがつしゆん。